【Zoom】親鸞上人と妙好人の言葉　　　　　　令和２年12月26日（土）

◎親鸞上人［1173-1263］

・1201年、六角堂で参籠、その後、法然上人を訪ねる。

・1207年、後鳥羽上皇により、念仏停止。法然上人の弟子４名が死刑。法然・親鸞含む７名が流罪。親鸞上人は越後（新潟県）へ流罪。

・1214年、関東へ向かう。茨城県（稲田）に長く滞在。

・62,3歳の頃（1135年頃）に帰京。

・1256年、息子の善鸞を義絶。

◎『歎異抄』

●一

　弥陀の本願には、老少・善悪の人をえらばれず。ただ、信心を要すと知るべし。そのゆえは、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

　しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆえに。

●二

　おのおの十余カ国の境（さかい）をこえて、身命をかえりみずして、 たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽の道を問ひきかんがためなり。

然るに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、心憎く思し召しおはしまして侍べらんは、大きなる誤なり。もし然らば南都北嶺にも、ゆゆしき学匠たち、多くおはせられて候うなれば、かの人々にも逢いたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

**親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられ参らすべしと、よき人の仰せを蒙（かぶ）りて、信ずる外に別の子細なきなり。**

**念仏はまことに浄土に生まるるたね（種）にてやはんべるらん。また地獄に堕つべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。**

**たとい法然上人にすかされ参らせて、念仏して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候う。**

その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にも堕ちて候はばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候はめ。**いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。**

弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申す旨、また空しかるべからず候うか。

詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくの如し。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、また捨てんとも、面々のおんはからひなり」と云云。

●三

　「**善人なおもって往生を遂ぐ。いわんや悪人をや**。…

自力作善の人はひとえに他力をたのむこころ欠けたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、**自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば**、真実報土の往生を遂ぐるなり。

煩悩具足のわれらは、いずれの行にても、生死を離るることあるべからざるを憐れみ給いて、願をおこし給う本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも、往生の正因なり。

よって、善人だにこそ往生すれ、まして、悪人は」と仰せ候いき。

●五

　親鸞は、父母の孝養（きょうよう）のためとて、一辺にても念仏申したること、いまだそうらわず。

●十三

わがこころの善くて殺さぬにはあらず。また、害せじと思うとも、百人・千人を殺すこともあるべし。

●十六

廻心は、日ごろ、本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては往生かなうべからずと思いて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみ参らするをこそ、廻心とは申し候え。…

わがはからわざるを自然と申すなり。これ、すなわち、他力にてまします。

●十八

聖人の常の仰せには、「**弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに、親鸞一人がためなりけり**。されば、それほどの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思しめしたちける本願のかたじけなさよ。」…

聖人の仰せには、「善・悪の二つ、総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころに善しと思しめすほどに知りとおしたらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思しめすほどに知りとおしたらばこし、悪しきを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫。火宅無常の世界は、万の事、みなもって、そら言・たわ言、まことあることなきに、ただ、念仏のみぞまことにておわします」

◎『末燈鈔』（書簡集）

●九

… 誓願・名号と申してかわりたること候わず。誓願をはなれたる名号も候わず、名号をはなれたる誓願も候わず候う。かく申し候うも、はからいにて候なり。ただ誓願を不思議と信じ、また名号を**不思議と一念信じとなえつるうえは、何条わがはからいをいたすべき。ききわけ、しりわくるなど、わずらわしくは仰せられ候うやらん。これみなひがごとにて候うなり。ただ不思議と信じつるうえは、とかく御はからいあるべからず候う**。往生の業にはわたくしのはからいはあるまじく候うなり。あなかしこあなかしこ。

**ただ如来にまかせ参らせおわしますべく候う**。あなかしこあなかしこ。

五月五日　　親鸞

**他力には義なきを義とす**とは申し候うなり。

●十

御ふみくわしくうけたまわり候いぬ。さては御法門の御不審に、一念発起信心のとき、無碍の心光に摂護せられ参らせ候ゆえに、つねに浄土の業因決定すとおおせられ候う。これめでたく候う。かくめでたくはおおせ候えども、これみなわたくしの御はからいになりぬとおぼえ候う。ただ不思議と信ぜさせ給い候いぬるうえは、わずらわしきはからいあるべからず候う。

またある人の候うなること、出家のこころおおく［この世を逃れ浄土往生を願うこと］、浄土の業因［＝念仏を唱えること］すくなしと候なるは、こころえがたく候う。出世と候うも、浄土の業因と候うも、みなひとつにて候うなり。すべて、これ、なまじいなる御はからいと存じ候う。仏智不思議と信じさせ給い候いなば、別にわずらわしく、とかくの御はからいあるべからず候う。ただ、ひとびとのとかく申し候わんことをば、御不審あるべからず候う。

**ただ、如来の誓願にまかせ参らせ給うべく候う。とかくの御はからいあるべからず候うなり**。あなかしこあなかしこ。

五月五日　　　親鸞

他力と申し候うは、とかくのはからいなきを申し候うなり。

●十六

… **悪はおもうさまに振舞うべし**と仰せられ候うなるこそ、かえすがえすあるべくも候わず。… 凡夫なればとて、**なにごともおもうさまならば**、盗みをもし、人をも殺しなんどすべきかは。もと盗みごころあらん人も、極楽をねがい、念仏を申すほどのことになりなば、**もとひごうたるこころをもおもいなおしてこそあるべきに**、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずということ、ゆめゆめあるべからず候う。…

**振舞いはなにとも、こころにまかせよといいつると候うらん、あさましきことに候う**。この世のわろきをも捨て、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとい、念仏申すことにては候え。…

**いつか、わがこころのわろきにまかせて振舞えとは候う**。おおかた、経釈をも知らず、如来の御ことをも知らぬ身に、ゆめゆめその沙汰あるべくも候わず。あなかしこあなかしこ。

●十九

としごろ念仏して往生ねがうしるしには、**もとあしかりしわがこころをもおもいかえして**、友・同朋にもねんごろにこころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにても候わめとこそおぼえ候え。よくよく御心得候うべし。

●二十

**煩悩具足の身なればとて、こころにまかせて、身にも、すまじきことをもゆるし、口にも、言うまじきことをもゆるし、意［こころ］にも、おもうまじきことをもゆるして、いかにも、こころのままにてあるべしと申しあうて候うらんこそ、かえすがえす不便におぼえ候え**。酔いもさめぬさきになお酒をすすめ、毒もきえやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごとし。薬あり、毒をこのめと候うらんことは、あるべく候わずとぞおぼえ候う。…

はじめて仏の誓いを聞きはじむる人々の、わが身のわろく、こころのわろきをおもい知りて、この身のようにては、なんぞ往生せんずるというひとにこそ、煩悩具足したる身なれば、わがこころの善悪をば沙汰せず、むかえ給うぞとは申し候え。かく聞きてのち、仏を信ぜんとおもうこころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとい、流転せんことをもかなしみて、ふかく誓いをも信じ、阿弥陀仏をもこのみ申しなんどする人は、もとも、**こころのままにて悪事をもふるまいなんどせじ**とおぼしめしあわせ給わばこそ、世をいとうしるしにても候わめ。また往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりておこるとこそみえて候えば、さりとも、まことのこころおこらせ給いなんには、**いかがむかしの御こころのままにては候うべき**。

◎妙好人の言葉

●和泉の吉兵衛　1803年1/27～1880年（明治13年）6/1

　大阪府泉北郡浜寺町大字船尾村（現在の堺市浜寺船尾町）の人。

・106．寝ている間も道中している

　「夜分に足を伸ばして寝ている間も道中しているノヤ。歩いている時道中していることは皆承知しているけれど、寝ている間も道中していることは一向気がつかぬワヤ。」

・107．　一息一息放り出されている

　「今日の日は我が生涯にもう一遍暮し直しが出来ぬ、通り一遍の（またとない）大切ない（大切な）日であると思うて、味おうて暮しておくれ。朝が昼となり、昼が晩となり、片時も同じ所にじっとして居られぬ。一息一息放り出されているノヤ。」

・126．　死ぬる事が知れたら

　「この世界で人が一番嫌がることは何かと申せば、死ぬる事である。死ぬる事を思うと、している仕事も手につかぬと申す。また死ぬること聞くも嫌、知らずに暮らしている方が余程よい。仏法を聞くと死ぬる話ばかりやと思う人がある。それは大きな間違いヤ。死ぬること思うた故、また死ぬることを聞いた故早う死ぬのでなし、聞かずにいたら長生きするのでない。本当に死ぬる事が知れたら、毎日勇んで日が送れるノヤ。」

・143．これが七十八の聴聞

　隠居様が御死去になる年の七十八才の時、「七十八の聴聞は、こんな者で聞こえることでも知れることでもなかったと解った。これが七十八の聴聞である。」と申された。

・144．　お浄土参りの道中で弁当開き

　「本願一実の大道に通入せんと願うべし。お浄土参りの道中や。お浄土参りの道中をするのでお浄土へ参れるノヤ。伊勢参りするには伊勢道中、京参りするには京道中。その道中せずにそこへ行こうと思うのは無理ヤ。」

・146．　一つ外れたらナア

　　隠居様はおりおり、「我（われ）の方一つ外れたらエライことになるけれどナァ。」と申された。「一つ我が方が外れると、それから残らずみな生きて来るノヤ。一つ外れたらナァ」と言われた。

　また、ある人が「隠居様、私は思わくが外れました」と申された時、「一遍や二度外れたことぐらい何んヤ。臨終まで外れ通しヤ」と言われた。

・257．　何んにもならぬ、間に合わなんだ

　あるとき小梅様が隠居様に向かって、

「あなたは仕様のない爺様ヤと申されますが、私の仕様のないのとは違います」と申された。隠居様は、

　「何をいう、いっしょヤ（同じだ）」

といわれた。小梅さんは、

　「イイエ、違います」

という。隠居様は、

　「何をいう、いっしょヤ」

という。

　なんべん申しても、いっしょヤと申される。小梅さんは、

　「隠居様、それでも信心いただいている人と、いただいていない者とあるやおませんか」と言った。すると隠居様は、

　「それはある。」

といわれた。

　「それ見なされ。」

と小梅さんはしたり顔でいわれた。隠居様はその時、

　「こういうと、お前さん、何ぞ変ったむつかしいことがあるように思うか知らんが、何にも変ったむつかしいことがあるのでない。発起というて、我が方は何にもならぬ、間に合わなんだということが、内から起ってこなければならぬ訳があるワヤ」

といわれた。

・269．　仏法に遭わぬほど怖いことはない

　（福寿寺というお寺が、強盗に入られ、包丁で脅されたりし、金を取られ）家内中みな青くなってガチガチ震いしておられた。

　隠居様はそのようなこと知らず、船尾から朝早うお詣りなされた。忠治様が隠居様にこのことを申された時、

　「お前さんの家は有るよって（物があるから）取りにきたノヤ。やったらよいノヤ。コレ、そのようなことは怖いことでもなんでもないワヤ。人間に生まれて仏法によう遭わぬほど怖いことはないワヤ」

といわれた。忠治様はその言葉を聞いてようよう（漸く）震いが止ったと申しておられた。

・274．　変った死によう出来るかヤ

　伊左衛門様の門の前の人が大病で床についておられた。そこへ伊左衛門様はお見舞いに行かれて、

　「お前さん、なかなか大病やが、ひょっとしたら死ぬデ」

と申された。すると病人は、

　「こんなに子供が大勢いるのに死んでも死ねますか」

と言われた。

　それを聞いて伊左衛門様は呆れ果てて、家へ帰るなり家内に、

　「お梶、まあひどいものやナァ。仏法に遭わぬという者は。前の病人は死んでも死ねますかというた。そんな心になれるものやろか。」

と申された。

　それからその足で隠居様に会うために和泉へ歩いて行かれた。…

　それからようよう和泉に着いて、隠居様にお目にかかられた。隠居様は伊左衛門様を見るなり、

　「伊左衛門さんか、ようきてくれたようきてくれた。そやがちょっと待っておくれ」といって、すぐに村の同行に、

　「皆さんきておくれ。伊左衛門さんの御縁が立ちますよって」

と申されて案内に行かれた。皆がある舞ったところで伊左衛門様は、

　「ようきたのやない。こなければならぬのできましたノヤ。まあ、聞いて下され。私の家の門の前の大病人が、こないに子供が大勢いるのに、死んでも死ねますかといいますがな」

と申された。

　すると隠居様は顔色変えて、

　「伊左衛門さん、お前さん、その人と変った死によう出来るかヤ。お前は相談の仕甲斐のないものじゃ。さあ、この飯たべてチャッチャと去（い）んでくだんせ」

とたいそうお叱りなされた。…

・275．　鼻垂れてつくらんと立っている

　堺の平助様のお寄り（集会）に四か国のお同行が集っておられた。その場の御縁に一人のお同行が出言せられて、自分は仏法聴聞についていろいろと苦しんでいることを申された。伊左衛門様はそれを聞くなり、

　「そうヤそうヤ、そこで皆行き詰って苦しむノヤ。私もその橋渡ってきたノヤ。皆もその橋渡るノヤ」

と申された。すると隠居様は早速、

　「伊左衛門様、お前さん、その橋渡っておくれたかヤァ。定めしお大義であったやろ。この爺様はまあよう渡らずに橋詰で、鼻垂れて、つくらんと立っているワヤ」

と申された。

・295．　生き生き死んでいる

　…　「イイヤ、あれはオンヅマリがきたノヤ。死ぬるということは一息一息死んでいるノヤ」

・296．　ワァッというているままでよい

　盆踊りの晩に、…

　「清次郎様、アノマア踊っているあんばいどうや。順気（その場の雰囲気）に催されて、我を忘れて踊っている。あのようなことは銭出して頼んでも、あのようなあんばいにはいかんデ。コレ、手をあげてワァッというているままでよいのやデ」

●有福の善太郎

　善太郎は父を殺し　母を殺し

　その上には盗人をいたし

　人の肉をきり

　その上には親には不孝のしづめ

　人の女房を盗み

　この罪で　どうでもこうでも

　このたびとゆうこのたびは

　はりつけか　火あぶりか　打首か

　三つに一つは　どうでもこうでものがれられん

　この善太郎は

　過去も知らず

　また今日の日のことも知らず

　また未来の行く末のことは夢にも知らず

　食いたい　飲みたい　着たいで

昨日も月日を送られ　　今宵も送られて

　未来の近寄るを何とも思わず暮らすところ

　生生世世の初ごとに…

　待ち人は誰かとおして尋ねてみれば

　善太郎を待っておるとのご意見

　この善太郎は

生生世世（しょうじょうせぜ）の初ごとに

　あわれのお慈悲かたまりのご開山善知識の

　聞けよ聴聞せよのご意見を

　この善太郎は

　耳にお聞かせに遭うてみれば

　久遠劫のいにしえから　死にゆく臨終まで

　この善太郎がすることなすこと

　心に思うことも　口にゆうことも

　目に見ることも　耳に聞くことも

　手でなすことも　足になすことも

　みなことごとく　今この世を未来にかわしたら

　ことごとくみな悪になる

　この罪とがの報いをうけて

　今ここで　この世が未来にかわしても

　おそろしや　おそろしや

　この罪とがの障りをかかえておるゆえに

　十方三世の諸仏もに

　この罪とがかかえたものは　仏法の器にもよう入れんと

　除けるとのご意見ぞ　お聞かせに遭うてみれば

　…

　この善太郎は　生生世世の初ごとに

　あわれのお慈悲かたまりのご開山善知識の

　聞けよ聴聞せよのご意見を

　この善太郎が　耳にお聞かせに遭うてみれば

　阿弥陀如来のあわれみ不憫とおもしめして

　死にゆく未来　後生の一大事は

　まるでまるで　この阿弥陀如来が

　引きうけて　助けてやろう　救うてやろう　参らせてやろうご意見とは

　この善太郎は　生生世世の初ごとよ

　うれしや　とうとや　もったいなや

　…

　この善太郎　なみあみだぶつ

　この念仏　この善太郎のいのちあらんかぎりは

　ご恩報尽仏として　ねてもさめてもとのうべきものなり

　この善太郎

　　　下有福の善太郎の　七十四の歳　十一月十一にこれを書く

　金剛の信心ばかりにて　ながく生死をへだてける　この善太郎が

　この善太郎は

お慈悲のかたまりの善知識さまのご意見（に）遭うてみれば

この善太郎は

落ちる落ちんのゆう間はないげに候う

この善太郎は

このなりゆきが地獄の道中　昨日も地獄の道中

きょうも地獄の道中　今宵も地獄の道中

この善太郎は

このゆきなりが落ちるばかりのこの善太郎なれども

お慈悲の善知識さまのご意見を耳に聞いてみれば

この善太郎は

生生世世の初ごとに　どがあもせずにこうしておいて

この善太郎は

阿弥陀如来の清浄真実のおまことひとつの

なむあみだぶつさまのおいわれさまで引きうけて

助けてやろう　救うてやろうのご意見とは

この善太郎は

やれうれしや　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ

この念仏は　この善太郎のいのちあらんかぎり

ご恩報尽とこころうべきものなり

◎鈴木大拙『日本的霊性』（昭和18年）から。

法然もまた流謫（るたく）の憂き目を受けたが、これがために彼の最後は光あるものになった。彼をして今少しく若からしめたならば、その光彩は一段と増し出たことであろう。…

日本的霊性はまず法然に目覚めて、親鸞に引きつがれたというべきであろう。法然の所説を調べて見ると、なるほど、彼は南北の学匠たちから、迫害をうけ るべきだと思われるふしぶしが大いにある。学文にのみたよって、空疎な概念の世界を守りつづけ、それで「出世」の虚栄を獲得せんとした彼らから見れば、「法然房」のごとく「罪人」であり、「愚鈍第一」であるような人は、自分らの仲間には入れておけぬのである。今日のいわゆる危険人物である。法然及びその一味に対する彼らの迫害はすこぶる合理性をもって居たのである。

**霊性的直覚の端的**は、実に親鸞の左の句のうちに看取せられる。前掲引文の中に曰う、

「念仏はまことに浄土に生るたねにてや侍べるらん、また地獄におつる業にてや侍べるらん、総じてもて存知せざるなり」と。

また曰く、

「詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じ奉らんとも、また捨てんとも、面々の御計ひなり」と。

これは実に親鸞聖人の真面目を露堂々させて居るといわなくてはならぬ。「物のあわれ」などいって、涙ばかり流して居る平安歌人たちの夢想さえもし能わぬところではないか。聖人は実に霊性的直覚の人である。こんな言葉は概念の世界にのみ生きて居る人々の道破し能わぬところである。ここに鎌倉武士気質の一面が覗われる。「莫妄想！」「霧直向前！」に相通ずるものがある。

法然と室（むろ）の泊（とまり）の遊君との会見は、日本霊性史の上に記録すべき一事である。数百万の人間が生死する戦争も世界霊性史上の事件であるが、而してその量においてわれらを心の底から動著せしめるところのものであるが、質の上から見れば、遊君の宗教意識に触れたものも、亦世界の大事実であらねばならぬ。

真宗は念仏を主とするとか、浄土往生を教えるとか、その外何とかいうというのは、真宗信仰の真髄に触れて居ない。真宗は弥陀の誓願を信ずるというところに、その本拠を持って居る。誓願を信ずるというは、無辺の大慈悲にすがるということである。因果を超越し業報に束縛せられず、すべてそんなものをそっち除けて、働きかけてくる無磯の慈悲の光の中に、この身をなげ入れるということが、真宗の信仰生活であると、自分は信ずる。此土の延長である浄土往生は、あってもよし、なくてもよい。光の中に包まれて居るという自覚があれば、それで足りるのである。

親鸞は罪業からの解脱を説かぬ。すなわち、因果の繋縛からの自由を説かぬ。それはこの存在――現世的・相関的・業苦的存在をそのままにして、弥陀の絶対的本願力のはたらきに一切をまかせるというのである。そうしてここに弥陀なる絶対者と親鸞一人との関係を体認するのである。絶対者の大悲は、善悪是非を超越するのであるから、この方からの小さき思量、小さき善悪の行為などでは、それに到達すべくもないのである。ただこの身の所有と考えられるあらゆるものを、捨てようとも、留保しようとも思わず、自然法爾にして大悲の光被を受けるのである。… 日本的霊性のみが、因果を破壊せず、現世の存在を滅絶せずに、しかも弥陀の光をして一切をそのままに包被せしめたのである。これは日本的霊性にして始めて可能であった。

◎西田幾多郎『善の研究』の最後の段落

主観は自力である、客観は他力である。**我々が物を知り物を愛すというのは自力をすてて他力の信心に入る謂である**。人間一生の仕事が知と愛との外にないものとすれば、我々は日々に他力信心の上に働いているのである。学問も道徳も皆仏陀の光明であり、宗教という者はこの作用の極致である。学問や道徳は個々の差別的現象の上にこの他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全体の上において**絶対無限の仏陀その者に接する**のである。**「父よ、もしみこころにかなはばこの杯を我より離したまへ、されど我が意のままをなすにあらず、唯みこころのままになしたまへ」とか、「念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」とかいう語が宗教の極意である。**